

地層処分セミナー in 岐阜 開催結果

日 時：2016年9月3日（土）13:30～16:40

場 所：長良川国際会議場（岐阜県岐阜市）

後 援：経済産業省・資源エネルギー庁、日本経済団体連合会、日本商工会議所、経済同友会、全国商工会連合会、電気事業連合会、中部電力株式会社

参加者数：35名

(1) 映像（DVD「地層処分とは」）

(2) 説明 専門家、NUMO職員

■ 専門家（敬称略）

朽山 修（原子力安全研究協会技術顧問、
総合資源エネルギー調査会 地層処分技術ワーキンググループ委員長）

梶沢 勝三（東京都市大学客員教授、電力中央研究所上級特別契約研究員、
総合資源エネルギー調査会 地層処分技術ワーキンググループ委員）

(3) 質疑応答（主な内容）

- Q. 地層処分は300メートルより深いところとしているがなぜ。もっと深くすれば良いのではないか。
- A. 諸外国の動向、地下の状況を勘案して300メートルより深い場所とされ、法律にも明記されている。ただし、深くなればなるほど地熱が上昇し、作業環境やベントナイトにも熱の影響がでてくるので深ければよいというものでもない。
- Q. 科学的有望地は、どのように発表されるのか。
- A. 日本全国を、「適性が低い」、「適性がある」、適性がある地域の中でも「より適性が高い地域」の3つに分けて、マッピングして公表される予定。特定の市町村が科学的有望地として発表されるということではない。
- Q. 科学的有望地選定から何年後に文献調査の申入れをするといった目標はあるのか。
- A. 文献調査の申入れは地元のご理解が大前提であり、期限を区切って申し入れすることは考えていない。NUMOとして調査を受け入れて頂けるよう理解活動を続けていく。
- Q. ガラス固化体とはどんなものか。割れても漏れないのか。
- A. 放射性廃棄物を高温で溶かしたガラスと混ぜて固化したもので、ガラスの容器に入れたものではないので、ガラス固化体が割れても放射性物質が漏れたりすることはない。
- Q. 原子力発電所が再稼働すれば放射性廃棄物は増加し、処分場の処分能力を越えることも考えられるが、処分場の規模はなぜ40,000本以上なのか。
- A. 40,000本以上というのは、平成33年までの廃棄物発生量をもとに、法律に基づく最終処分計画で規定している。ただし、今後、地層処分事業を進める中で、原子力に関する政策動向や処理技術の開発動向等により、変わる可能性はある。
- Q. 放射能の減衰期間を短縮することはできないのか。
- A. 半減期を短くする研究が進められているが、実用化できるレベルではない。なお、半減期が短くなったとしても高レベル放射性廃棄物がなくなるわけではない。
- Q. スウェーデンはどのように地層処分が進んでいるのか。
- A. スウェーデンでは国の審査中。日本と同じように地質調査をして人間の生活環境に影響のない場所を選定している。
- Q. 地層処分するというが、10万年も20万年も先はわからない。100年でも500年でも持てばよいのでは。
- A. それまで地上に管理することの負担とリスクが大きいと考えている。待った結果、500年後も処理処分の目途がついていないということになれば、結局我々の子供世代にずっと負担とリスクの心配をかけながら問題を先送りし続けることになる。

以 上